

宣教における「文化」のとりえ方

「知られない神に」という伝道の前に

リバイバル・ジャパン編集長 谷口和一郎

2011年4月17日号に掲載した滝元順氏（新城教会主任牧師）の提言「明治維新で置かれた偽りの土台」を読んだ久保政氏（レムナント出版代表）から持論が寄せられた（28〜31頁）。日本文化と宣教という重要なテーマでもあるので、本誌の立場と考えを同時掲載する。

欧米型キリスト教への反省

世界各地の国と民族を植民化していった西洋諸国は、カトリック、プロテスタントを問わず、その国々にキリスト教を布教していった。彼らが指導したスタイルは、母国のものとさほど変わらず、南洋の島々に気密性の高い石造りの教会堂を建て、現地の牧師もネクタイを締めて説教を行う等のことが行われた。

日曜日の午前10時半からの礼拝、オルガンによる伴奏、復活記念日を「イースター」と呼んでタマゴを配る、「クリスマス」を重要行事とすること

など、欧米キリスト教の伝統と方式がそのまま適用されていった。また、教団ごとの伝統が、それぞれの国の事情などあまり考慮されずに導入されてきた。

こうしたことに対する反省から、それぞれの国の文化に配慮し、文化に適した宣教が実践されるようになってきた。日本では『文脈化教会の形成』（福田充男著）が出された1993年頃から議論され、実践されるようになってきた。それ自体は評価されるべきことであり、私たちはこの国独自のキリスト教のあり方を模索していくべきだろう。

一方で、文化適応し過ぎるという問題もあり、「文化」という言葉にどれだけの意味と範囲を含めるかという課題もある。日本のキリスト教会においても、A牧師が言う「文化」とB牧師が言う「文化」では、その範囲が異なることが多々ある。まず、この方はどういう意味で文化という

言葉を使っているのか、「文化適応」と言う場合に、どこまでの範囲を適応しようとしているのかを知る必要がある。

私としては、「文化」という言葉の中にその土地や国の「宗教」が含まれることは理解しながらも、宣教における「文化適応」においては、まずは「宗教的文化」と「生活的文化」を区別し、さらに「宗教的文化」の中で悪霊的要素を取り除いた部分と「生活的文化」のみを適応させるべきだと考える。

その意味で、偶像が多い仏教からはそのほとんどを取り除かなければならないだろうし、神道においても、かなりの注意を払わなければならないと考えている。

パウロの宣教

しかしまず、聖書から考えることが第一である。既存の宗教を利用した宣教を語る際によく引用されるの

が、使徒の働き17章。この箇所から、「パウロは『知られない神に』と言って宣教を始めているので、神道の神が実は創造主であることを示せばいい」ということが言われる。ダニエル・キカワ氏のDVD「神が日本に残した指紋」が発売されて以来、様々な方が口にするようになった。

しかし、神学―宣教論というのは、聖書の一箇所からつくり出してはならない。特に使徒の働きはナラティブ（事実を記した物語）であって、書簡のような教えの書ではない。つまり、良きにつけ悪しきにつけ、使徒たちの行動を順次記しているのであって、書かれていないからと言ってその行動が全て正しい訳ではないのだ。（実際、パウロとバルナバが反目したことも書かれている。）

とはいえ、ルカがある一定の意図を持ってこの使徒の働きを記したことも事実であり、その大きな流れから私たちは宣教論を組み立てることができる。一箇所からはつくれないが、全体の流れの中から、そして複数箇所からそれは可能だということだ。

使徒17章を見ていくと、「パウロは、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを感じた。」（16節）とある。そして会堂や広場で「イエスと復活を宣べ伝えた」（18節）。その文脈の中で「知られない神に」と刻まれた祭

壇のことを引用しつつ、宣教を続けている。

さらに「神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えるはいけません。神は、そのような無知の時代を見越しておられました。今は、どこでもすべのの人に悔い改めを命じておられます。」(29、30節)と語り、相手の宗教を「無知」と定め、悔い改めに導いている。その上で、福音の本質である、イエスの復活、死者の復活を強く示した。

パウロは、「知られない神に」と言いつつも、相手の宗教に対してはかなりの厳しい態度を取っている。ここを引用するのであれば、パウロの一連の宣教態度を見習うべきだろう。しかし

果して、日本のキリスト者に、偶像への憤りはあるだろうか。これほど大胆に、あざけられることを恐れず、悔い改めと復活を語っているだろうか。文脈化を言う前に、この基本姿勢ができていくかどうか問われる。

使徒の働き14章14節には、「あなたがたがこのようなむなししいことを捨てて、天と地と海との中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように」とあるが、「むなししいこと」とは「偶像崇拜」のことである。

また、第一コリント10章20節では、「神にではなくて悪霊にささげられて

いる」「あなたがたに悪霊と交わる者になつてもいたくありません」とあり、偶像の神への供え物が悪霊との交流になつて示している。人々がそのような宗教儀式に関わることで、知らず知らず悪霊の影響を受け、福音に覆いが掛けられていくということだ。

第一テサロニケ1章9節では、「あなたがたがどのように偶像から神に立ち返つて、生けるまことの神に仕えるようになり」と、他宗教からの明確な立ち返りの重要性を示している。これは、西洋の宣教師が言っていることではなく、使徒パウロが言っていることである。

神道の宗教性

「神道は仏教と違って偶像がない、むしろそれは日本の文化と言っている」というようなことが言われる。確かに偶像はない。しかし問題は、異なった神への礼拝、そして死者崇拜である。

日本各地の神社は、その発祥において様々な宗教的理由があり、多様な性があるが、死者の霊が怨霊にならないようにと祀った神社が数多くある。いわゆる御霊神社。菅原道真を祀った天満宮などが有名だ。

皇居にある宮中三殿(賢所・皇靈殿・神殿)の賢所では皇祖神・天照大神

が祀られ、皇靈殿では歴代天皇と皇族の霊が祀られ、神殿では天神地祇が祀られている。天皇の拝礼はこれら様々な神・祖霊に対して行われている。また、靖国神社は言うまでもなく戦没者が祀られている。

戦前・戦中を通して、国民はこぞつて神社参拝を命じられ、キリスト教会のほとんどもそれを受け入れていった。明治天皇を祀る明治神宮を参拝し、女神アマテラスを祀る伊勢神宮を参拝していった。1942年1月11日、日本基督教団の統理・富田満は伊勢神宮を参拝し、アマテラスに教団の設立を報告し、新教団の発展を祈願した。

富田は、当時植民地だった朝鮮を訪れて、「神社は宗教ではなくて儀礼だ」として朝鮮のキリスト教指導者に神社参拝を迫り、長老会総会は、1938年の総会で結局、神社参拝を決議するに至った。参加した牧師の一人は「天照大神も天皇も決して神ではない。これら拝むことは偶像崇拜に等しい。命がけてこれに反対しなければならぬ。日本はいつか神の掟によつて必ず滅亡する」と語った。(『日韓の歴史のはざまにて』安載禎著)そして参拝しない牧師は迫害を受け、殉教する者も出た。

「神社は宗教ではない、日本の文化だ」この言葉でどれほどのキリスト者

が誤魔化され、迫害を受けていったのか、それを私たちはもう一度よく考えなければならぬ。偶像礼拝・偶像崇拜というのはつまるところ、偶像が有るか無いかではなく、ヤハウェの神以外の神を意識的であれ無意識的であれ拜んでいるかどうか、交わりを持っているかどうかということである。

戦後、天皇の人間宣言があり、国家神道は解体された訳だが、神社それぞれのカミが変わったわけではない。つまり、礼拝の対象は変わらず、皇居に置かれた宮中三殿もそのままだ。日本における社会的立場は変わったが、本質は変わっていないのである。

神道が持つこうした側面を無視したまま、その最高神とされる天之御中主を天の父になぞらえ、伝道に利用していくことは、あまりに無防備に過ぎるのではないかと思う。そして先に述べたように、使徒たちの宣教の大きな流れを理解することが重要だ。彼らが何を強調し、どのような方法で伝えたかということ。大きな流れとしては、相手に合わせるといよりは、がむしゃらに復活を伝えていったのではないか。

本誌としても、「知られない神に」という伝道の前に、復活のキリストをいかに日本人に伝えていけばいいかを追求していきたい。